

615) 三流ホテル

小生は生まれも育ちもさいたま市である。しかしこの 50 年の間にふるさとの面影はカケラもなくなった。そこで最近群馬県高崎市の郊外によく出かけている。山があって、川があって畑があって、「うさぎ追いしあの山、小鮒釣りしあの川」の面影がどことなくふるさとを思い出させてくれるからである。町の人ともすっかり親しくなって、農作業を手伝ったり野菜をたくさん貰ってきたりしている。それに適度な農作業は、小生の老体にもちょうどよい刺激になる。だからここに行くときは、よく近所のホテルに 1 泊する。ごみ焼却場の隣に出来た山奥のかなり古い町営ホテルで、ウオシュレットもなければ、いまだに地上波テレビである。しかし各部屋には湯量たっぷりのお湯が出る。ゴミを燃やして作った湯なのだろう。おまけに 1 泊朝食付きで、税込み 5,130 円という値段がなんとも魅力的なのである。

予約を入れると、数回目から小生の名前を覚えてしまったらしく、いたく丁重な返事が返ってくる。建物の一番奥の「301 号室は空いてますか？」と訪ねるのが小生の常なのだが、「ハイ大丈夫です。お客様以外に予約は入っておりませんので、どこでもご自由にお使いください。」という返事が度々返ってくる。何でも毎年 2,000 万円の赤字なのだそうだが、5,130 円が魅力で他のところは目をつぶって、ここを定宿にしている。マァ年に 10 泊すると、赤字は 1995 万円になる計算というわけである。